

会話分析による談話単位の革新とその課題

水 川 喜 文

目 次

問題設定

1. 会話分析と言語学の接点
2. 会話分析の言語学へのインパクト：談話の単位
3. 会話分析による談話単位の転換
4. 会話分析における TCU と還元主義
5. 会話分析における実践と予期
おわりに

問題設定

本稿の目的は、会話分析によっていかに談話単位の研究が革新され、それは同時にどのような課題があるのか明らかにすることである。会話分析は、社会学に生まれ言語学など他の研究領域と影響しあって一つの調査研究方法として確立しつつある(串田 2006, 串田ほか編 2008)。本稿では、この会話分析の中でも H. サックスから E. シェグロフ, G. ラーナーなどへ流れを中心に考察対象として、まず、言語学における会話分析の受容と展開を、自然言語を扱う談話の基本単位の革新という視点から概観する。そして、会話分析が前提とするいくつかの事柄、特に分析における常識的知識の使用と時間性に関する諸前提について議論する。そして、これらの議論をもとに、この会話分析がよって立つ視点におけるいくつかの問題点を明らかにする。

1. 会話分析と言語学の接点

会話分析は、社会学において H. ガーフィングケル (1967) によるエスノメソドロジーの発想や E. ゴフマンの相互行為場面の分析の影響を受けながら、ハーヴェイ・サックスが1960年代に行った講義 (1992) などで示されたアイデアを元に生み出された (Schegloff 1992: viii - xv, xxii - xxiv, 1997a: 52)。その後、1970年代にかけて H. サックスやエマニュエル・シェグロフらによって現在使われている基本的な方針と分析法が確立していった。その後、エスノメソドロジーに方向付けられた会話分析の研究は、A. ポメラント (優先構造研究), C. グッドウィン (相互行為と視線の研究, ビデオ分析), J. ヘリテイジ (制度的場面の会話分析) らによって「相互行為におけるトーク (talk-in-interaction)」の研究として展開してきた。

同時に、シェグロフを中心とした会話分析のグループは、社会学者よりも言語学からの追隨者を生み出し、その分析を技術的にも発達させてきた。言語学において1980年代から H. Houtkoop と H. Mazeland (1985), S. A. トンプソンなど自然言語を扱う言語学 (特に、機能言語学と呼ばれる専門領域) で注目されるようになり、現在では会話分析が自然言語を扱う言語学に与える影響は否定することができないばかりか、「会話分析」として言語学にも一群の研究領域が形成されつつあるとあってよい (Ochs, Schegloff and Thompson (eds) 1997) (注1)。本稿は、このような言語

学における会話分析の受容（と展開）を、言語使用における談話単位の発見という視点から一つの道筋を与えることにより、言語学で受容されたサックスからシェグロフ、G. ラーナーへと流れる会話分析の方法論を社会学の立場から批判的に解明していこうという試みである。

本稿では、まず、クールタード（1977=1999）による談話分析のテキストにそって会話分析と言語学の接点を概観し、会話分析におけるターン（順番）とシークエンス（継起）の組織化に関する分析が、言語学における自然言語分析の「単位」の設定に与えた影響について考えていきたい。次に、サックスからシェグロフへ流れる会話分析における単位（ターン構成単位=Turn Constructional Unit）を具体的な会話の分析から再構成・再検討する（注2）。そして、その会話分析における会話データの単位を基礎とする分析（過去）、進行中の実践（現在）、活動の予期（未来）に対する理論的立場、すなわち会話分析における時間性について議論したい。最後に、これらの研究が社会現象を解明する場合に発生するいくつかの課題を、エスノメソドロジーによる常識的知識と発話現象のリフレクシブな関係をもとに批判的に考察していきたい。

2. 会話分析の言語学へのインパクト： 談話の単位

本稿で考察するサックスからシェグロフへ流れる会話分析の範囲を説明するには、P. テン・ハーヴ（1999：8,162, 2001：5）などが言ういわゆる Pure CA（純／基礎会話分析）、Applied CA（応用会話分析）という分類が参考になるだろう（注3）。J. ヘリテージ（2004：223）によれば、前者の Pure CA は、「相互行為という社会制度（the social institution of interaction）」をそれ自体とし

て扱う、つまり、会話の相互行為それ自体を「純粋に」制度として扱うことにより、相互行為のメカニズムを「純粋に」扱うものとされる。この結果、会話における言語的な相互行為それ自体であるターンの構成についての研究に特化することになり、言語学との強い接点が生まれる。後者の Applied CA は、「相互行為における社会制度（the social institution in interaction）」の取り扱い・運用（management）を扱う。つまり、ある社会制度において相互行為がいかに現れてくるか研究する。その結果、病院という社会制度の相互行為研究、学校という社会制度の研究というように、社会学的な色彩が濃くなるのである。

現在、この Pure CA 中心は E. A. シェグロフから G. ラーナーへと流れ、言語学者が会話分析を参照する際によりどころにしているものの一つとなっている（Lerner 2003, Lerner (ed.) 2004）。本節では、会話分析と言語学、特に社会言語学における関係を明らかにするとともに、自然言語を扱う言語学において、会話分析がいかに革新的であったか描き出しておこう。

サックスとシェグロフの会話分析が社会言語学に与えた最も大きな影響は、よく言われるように何度も会話を再現可能な録音したデータを利用して、自然会話（natural conversation）の分析可能性を示したことである。会話分析以前の言語学においては、人々が実際に語った言語（これは、文法的誤り等を含む）を十分に扱ってきたとはいえない。それまでの言語学では、研究者が例として作り出した書き言葉による理想言語としての語や文の研究や、マクロ／ミドルレンジの社会的カテゴリー（民族、性、制度など）にレリバントな社会的文脈による語や文の変化といった理念型による研究がなされてきた。これらに対して、サックスらが行ったのは、自然会話、すなわち自然に生起する会話（naturally occur-

ring ongoing conversation) を分析する可能性の提示だった。ここには理想言語／理念型における秩序の発見から、実際に社会の成員によって生み出された自然会話に内属する秩序を、会話分析の分析概念により詳細に記述するという転換が行われた。この分析対象の転換が(社会)言語学に大きなインパクトを与えていることは確かである。

クールタードによる言語学のテキスト(1977:62-68)によれば、当時新しい言語学として登場した自然言語を扱う談話分析(discourse analysis)が、伝統的な書き言葉中心の言語研究と最も違うところの一つは、「談話構造の単位をどのようにするか」という課題を持つ点である。伝統的な書き言葉中心の言語学における単位は、(文法的に正しい)「文」、「節」、「単語」といったものがあり、その文法の記述は「文」を最大の単位として解釈している。そのため、文という枠組みを越えた制約に関して予測することは困難であった。そのことをクールタードは次のような例(ラボフ 1970)を用いて説明している。

(例 1)

A: Where's the typewriter? (タイプライターはどこですか?)

B1: In the cupboard. (戸棚の中です)

B2: Is it in the cupboard? (戸棚の中ですか?)

B3: Look in the cupboard. (戸棚のなかを捜しなさい)

B4: I think it's in the cupboard. (それは戸棚の中だと思いますよ)

この例において、Aの発話を既存の文法の観点から見ることによっては、次に続くBの発話を予期したり、Bの発話に対する制約を記述したりといったことは困難である。なぜ

なら、Aの発話は疑問形の文でなされているのに対して、Bの発話は、ここに出ているだけでも副詞句、疑問形の文、命令形の文、名詞節を含む平叙文という文法的には予測が困難な形で現れることができる。しかし、実際の会話を聞いたり、想定として談話を構成してみたりすることをしてみれば、Aの発話の後に続くBの発話は、一定の制約があり、そのような制約を会話の参加者も分析者も想定することができる。

このような現象は、クールタードによれば次のような機能的単位という観点から説明することができる。すなわち、「質問」と「応答」、「要請」と「受諾」などに関する有意味な構造を「機能的単位」という観点を採用することによってこれらの制約を描き出すことである。この機能的単位は、「文」や「節」という文法の枠組みを越えて結びついている。

ここでラボフは「言われたこと」と「なされたこと」を区別することによって会話の機能を見出すことができると述べる。つまり、「言われたこと」としての書き言葉のための文法から、「なされたこと」としての発話行為の機能的単位への視点の移動である。このように談話分析における分析単位は、それまでの形態的文法単位としての文法的に定義された節や文ではなく機能的単位である。もちろん、その機能的単位は、単一の節や文、語、あるいは身体動作によっても実現されることは可能である。しかし、「なされたこと」に注目すれば、この機能とは談話単位の意味のことであり、質問する、回答する、呼びかける、応答するといった意味づけられた発話行為となる。

このように方向付けられた自然会話の談話分析には、次の二つの課題が提出されることになる。一つは、「何を機能的単位とするか?」ということであり、もう一つは「どのように規則を設定するか?」という問題である。例

えば、ラボフ (1970, 1972) は、「質問」と「応答」という単位を設定して、解釈規則と共有知識という概念を使って説明している。

(例 2)

A: Are you going to work tomorrow?

(明日は仕事あるの?)

B: I'm on jury duty. (陪審員の仕事があるんだ。)

ここで、Aの「質問」は、質問の形式上、「はい」「いいえ」という「応答」が対応する。しかし、この場合そうならないにもかかわらず「応答」が成り立っているのは、「陪審員の仕事がある」ことが、「いいえ」という応答と同等であることをAとBが共有知識として持っているからである。そのことが成り立つには、AとBは、この変換を行う解釈規則を共有している。このように議論が進む。

この方法には少なくとも二つの大きな問題があった。一つは、「質問」「応答」という個別の意味を持った発話行為を単位としたこと。これによって、発話行為の個別の解釈規則を作らなければならなくなった。そのため発話行為の数だけ (すなわち無数に) 解釈規則が必要となった。もう一つは、発話者の共有知識に言及するという問題の先送りをしたことである。「共有知識があるからBの発話が起きた」という説明は、「Bの発話が起きたから共有知識があることがわかる」という説明と置き換えることができる。こうなると、次の発話の制約について議論しているにもかかわらず、その制約を知るにはその発話者の心的内容である共有知識を事前に知らなければならない。これには問題がある。しかし、このような解釈規則と共有知識の考察は、ある程度の説得力を持って談話分析として展開していったのだが、その分析が深まれば深まるほど、当初の発想である「談話の単位」とい

う発想から遠ざかることになった。

3. 会話分析による談話単位の転換

社会学から生まれた会話分析は、このような袋小路におちいていた談話機能分析に一つの方向性を与えたと考えられる。例えば、先の例1で言えば、Aは、「質問」という発話 (utterance) またはターン (順番, turn) の機能を生じさせることにより、次のBによる「応答」という発話/ターンが導き出される、と考える。すなわち、二つのターンのペア (対) によって会話的相互行為が遂行されると考えるのである。この「質問」「応答」によるターンという単位は、「文, 節, 句, 語によって構成される」(Sacks, Schegloff and Jefferson 1974) ため伝統的な文法では不可能な制約を会話に見出すことになる。

「質問」と「応答」は「隣接対」を構成することによって、「質問」の次に「応答」という予期を可能にし、「応答」が無いことを「沈黙」、しかも「Bの沈黙」として理解可能にする。また、例えばBが「青のですか、赤のですか?」のように「質問」に「質問」で応答するなら、{質問A→{質問B→応答B}→応答A}という入れ子構造を生み出すことも可能である。

このようにして、サックスらの会話分析は、(結果として) 談話分析に一つの機能的単位を提案することになる。それにより、談話分析において、ターンという発想をもとに分析をするという可能性が生まれた。会話分析はこのような言語学の新たな可能性を提示していたにもかかわらず、シュグロフが1979年に言語学の論文集へ「修復 (repair)」に関する論文を寄稿し、ホートクープとメイズランドが1985年にサックスやシュグロフらの論文を参照した論文を出すまでは、ほとんど言語学の表舞台で省みられることは無かった (注4)。その後、S. フォックスなどがシュグ

ロフの成果をもとに広く研究を発表しはじめたのは1990年代後半からである。これらを考えれば、クールタードの1977年の議論は先見性があったといえよう。

しかし、クールタードの理解には一つの問題点があった。それは、このターンを「単位」と考えていたことそれ自体にある。例えば、クールタードは次のようにして会話分析の問題点を指摘している。

(例3)

A: How are you feeling? (ごきげんいかが?)

B: Fine thanks. (いいです、ありがとう)

B: And you? (あなたは?)

ここで、クールタード (1977: 92) は、Bの発話が一つのターンなのか、二つのターンなのかと疑問を呈している。Aの発話を「挨拶」とするのに対して、Bの発話を「応答」と「質問」とするなら、Bは二つのターンを構成しているのか、一つのターンに二つの要素があるのか、それを定義する条件は何なのか、と。このように、クールタードは、どのような条件の下でターンを定義できるのか、という方向で考えているために、会話分析における定義の曖昧さが問題となった。しかし、会話分析においてこのターンは即ち単位となるものではなかったのである。

シェグロフが述べるところによると、サククスらが会話の構成要素としたものは「ターン構成要素」(Turn-Constructional Unit, TCU)であり、この(単数もしくは複数の)TCUが構成するものがターンである (Sacks et. al. 1978: 702-4, Schegloff 1996: 55)。このTCUは可能な完了ターンを構成することができ、この可能な完了により、話者交代が「レリバントに」なる。つまり、先のBの発話は、“Fine thanks”で一つのTCUを構成し、“And you”で一つのTCUを構成

するという二つのTCUによって一つのターンを構成していると考えることができる。このTCUの完了は予期することができ、発話者は、TCUを利用することにより会話の継起的組織化を行っているのである。いかにしてこのTCUを定義するか、という点が会話分析の特徴ともあるが、これについては後に説明しよう。

ともあれ、サククスらは、会話／談話の機能的単位問題を、ターンという発想を用いることで、TUCという単位を用いて分析可能にした。そして、機能的構成単位間の(規則)問題を、継起的組織化 (Sequential Organization) という方向で解決しようとする試みを始めた。このターンという概念を導入することにより、それまでのように談話を個別の機能を定義して分類し考察するのではなく、ターンを構成するユニット、ターンの継起的組織化という問題として分析する可能性を拓いた。

このように会話分析は、談話分析に対してTCUという構成単位を導入し、後に談話機能言語学の一部と融合することにより、会話の継起的組織化の研究を展開することとなった。その結果、まず、会話分析は、談話分析において例文として研究者が作成した文章だけではなく、自然会話の分析可能性を生み出した。そして、相互行為におけるトーク (talk-in-interaction) の構造的特徴の解明を可能にし、「完全な文」をもとにした「文法」概念の転換を行ったと言えよう (注5)。

4. 会話分析におけるTCUと還元主義

これまで見たように会話分析は、「自然の観察科学」(Sacks)として会話を分析するのだが、その際、会話データをTCUという単位の構成物としてみていく。一般に、このように会話分析の用語を使って会話データを分析するところだけ見ると、分析概念(技術)をデータに適用しただけ、会話分析の用語で

説明しただけであるような印象を持たれるかもしれない。例えば、「質問」に対して「応答がない」ことが理解可能となるのは「隣接対」という分析概念を使って説明される。このことだけを見ると会話現象に対して会話分析の単位に分解して、その組み合わせとして写像(L.ウィトゲンシュタイン)として説明しているように見える。

しかし、この論文で主張したいもう一つのこと、この単位を同定する際の常識的知識の使用法と、現象への時間の取り扱いにおいてエスノメソドロジ的色彩を残しているということである。シュグロフ(1997:53)のいう、後付(post hoc)の研究とリアルタイムの説明という二つの区別が参考になる。

まずは、会話分析がどのようにTCUを同定しているか見ていこう。

例 4 (西阪 2001:185-186)

実験者(E1とE2)が、マニュアルを読み上げながら被験者(Sb)に対して実験を進めている。

- 1 E1: いいですか? Cに焦点を合わせてください。
- 2 (沈黙)
- 3 Sb: °なんていうの?°
- 4 E2: え? 「はい」。
- 5 E1: 「はい:」だけでいい [す:.]
- 6 Sb: 「はい。 [はい。

ここで、E1, E2は、心理学の実験者で、Sbは被験者。実験者が説明したときに、被験者が何も言わないので、どのように返事をすればいいか説明している。4行目でE2は、「え?」と発話している。これが適切な応答なのか、それとも聞き逃したのか、それとも単に驚きを意味するのかというのは、そのデータに即して「ネイティブの直感」(ガーフィンケル)を動員して、シークエンスの組織化における位置を決定していく。

会話分析の枠組みによれば、Sb(3)は一つのTCUを構成し、E2(4)は「え?」と「『はい』」という二つのTCUを構成していると考えられる。もちろん、「え?は」「い」ではない。ここでE2は、「え?」と驚いて(感嘆の叫び、ゴフマン)、「『はい』」と正しい応答の仕方を示している。「え?」とE2が言った後で沈黙したなら、そこが発話交代の点となりSbかE1が発話を続ける可能性はある。つまり、「え?」と「『はい』」の間(ギャップ)は、物理的な境界であると共に、参加者にとっては有意義なしかるべき境界が見て取れるのである(注6)。

このようなTCUの同定をする際に、伝統的社会学という「行為者」に内在する「主観」から見る(つまり、行為者主観によって定義される)ゆえにTCUとしているのではなく、また、行為者のよってたつ社会的条件のもとでTCUとしているのでもない。むしろ、参加者(素人)と共に会話分析者(専門家)も「ネイティブの直感」(ガーフィンケル)として話者交代が可能となる境界が理解可能であるがゆえ(つまり、公的に表示可能であるからゆえ)にTCUの境界となっている。そのため、TCUが同定されることが出発点になり、その同定の条件についての分析が開始される。逆ではないのだ。この出発点から始まり、どのような場面で、どのような韻律でと分析は続いていくのである。この会話分析の方針を使わない研究であれば、発話交代を条件に分けて試行し、分類し、定義付け、どのような条件の下でTCUとなるか定義する方向に向かうであろう。もしくは、話者交代の分類が、特定の社会・文化的条件(国籍、性別など)によっていかに変化するかといったように研究は進められるであろう。しかし、このようなアプローチが前提とすべきTCUは、話者交替の可能性をもとにしているため、「ある」「ない」という形で現れるのではなく、その可能性の強弱がネイティブの直感に

よってしまう。さらには、その直感を発動するためには、会話現象の詳細に言及せざるを得ない。つまり、明確な条件がわかった後にTCUが定義付けられるのではなく、その他の場面の詳細も参照しないとTCUは定義不可能なのである。そのため、会話場面の条件に分けてTCUの発現を明確にするという試みは基本的な困難を持ってしまっている。

会話分析がいう、データ（現象）に沿って、データ（現象）に即して徹底的に厳密にといった言葉は、現象を見た人が公的な表現で「見て言える」、つまり、「説明可能な（ガーフィンケル）」ことを資源（リソース）としている。会話分析にとってTCUは、「発見されるべきもの」（トピック）であり、分析の作業の中において共同で探求される。その際に、TCUの境界は「話者交代が可能である」という可能性の束として探求される。その結果、可能性の度合いは、ネイティブの直感によるということになる。これは、分析の不安定さを示しているのではなく、むしろ、共同で「見て言える」確かさを示すことになる。

このようにして、録音データは、TCUの組み合わせによって分解され、複数のTCUが組み合わせられた分析概念として再構築される。たとえば、この例を使って「Next Turn Repair Initiator (NTRI: 次ターンで修復を促すターン)」についての考察をするところを見てみるとよい。

例4の4行目で、E1が発話した後で、E2が「え？」と言う（4行目）。これが、適切な応答なのか、それともSb（3行目）を聞き逃したのか、それとも単に驚きを意味するのかというのは、上に述べたとおり、そのデータに即してネイティブの直感を動員して決定していく。この際のネイティブの直感とは、参加者が意識して理解している事柄とは限らない。むしろ、専門家である会話分析者がその場面の詳細を見ることによって常識的知識を共同で用いて説明可能（accountable）

となる事柄である。反復して聞くことの出来るテープを利用する、その後の参加者の反応を見る、声の大きさ、ピッチをもう一度聞く、その結果を他の分析者と共有して考える、といった過程を経て、TCUを推定し、その組み合わせがNTRIかどうかということが会話分析の成果として出てくるのである。

この分解をする際に先に述べた「ネイティブの直感」つまり常識的知識が共同で使われることになる。そのため、会話分析では（録音データに記録された）言語それ自体を分析することを目的としない。その局所的場面どのように現象が生み出されたか、その現象に沿って考察するのである。例えば、ある人の質問に対して、相手が首を縦に動かして応答したとしよう。これは会話分析の録音データには現れないから分析不能になるわけではない。むしろ、首を縦に振って「うなずいた」という現象がその他の観察により理解可能であるなら、それがネイティブの直感として共同で利用されることになる。そして、質問に対して「うなずいて答えた」ことが分析者にとって（も、参加者にとっても）利用可能な資源となるのである。

このように当該の現象に使われる常識的知識を動員して会話現象を分析するということは、逆にシグロフにとって音声データだけを分析することで十分な分析が可能になるという理由を与えることになる。シグロフは一貫して音声データを中心に分析を進めてきた。このようにしてきた理由には、音声データを理解可能にするためには、常識的知識の十分な適用が必要であり、それには身体動作や場面固有の理解などが含まれており、それを音声データによる会話を理解するために使えばいいという考えがあったためであろう。

会話分析に際してフィールドワークや当事者へのインタビュー、背景的知識などが必要なのはこのようなネイティブの直感が分析には欠かせないものだからである。この過程は、

「発見されるべき対象」としての TCU の性質を示している。会話分析者は（専門家）共同で推論し、専門的で厳密な意味で TCU を発見する。会話分析者にとって TCU は発見可能な対象（トピック）なのである。そういう意味で、会話分析は「自然の観察科学」（サックス）となっている。

このような常識的知識を動員した結果、録音データに根拠を持つその現象は、会話分析が提供する様々な分析概念という「中間言語」に翻訳される。会話分析が、図式の適用としてみられるのはこのような分析の性質を、中間言語（分析概念）への変換を見て言われるからである。ただ、その際に注意すべきことは、この TCU の判断が可能性の束というべき、可能性として提示されるものである。また、そのような可能性としてしか提示できないのである。

この過程は、会話分析者から見ると、「現象に即して厳密に」考察を重ねているように見える（その結果として分析用語が出てくる）とされる一方で、非会話分析者から見ると分析用語の単純な適用にしか見えなくなる。その中で、TCU がいかに組み合わせられるかが検討されることになる。その結果として、「分析枠組みとしての会話分析」（Mori 1999: 1）のような発想が生まれてくるのである。このように TCU をはじめとする中間言語への訳解という意味では、会話分析は会話現象を TCU という根源的要素に還元していく要素還元主義（reductionism）といえる（注7）。

このように考えると、シュゲロフの一つの可能な読みとして次のようになるかもしれない。つまり、自然言語を扱うことにより、会話の分析単位を、文法で言う、文、節、句、語という区別から TCU へ変更したのだと。そのことによって、文などから TCU へ分析単位を変更したのであると（Schegloff 1997 a: 56-）（注8）。しかし、これまで見たように、会話分析では、分析者（専門家）が TCU

を決定する際、参与者（素人）の常識的知識を共同で明らかにしなければならない。ここにサックスからシュゲロフ、ラーナーなどへと流れる会話分析はかろうじてエスノメソドロジ的な色彩を残しているのである。

5. 会話分析における実践と予期

これまで見たとおり、本稿で扱う会話分析は、「過去」に行われた会話現象（データ）を分析する際には「自然の観察科学」として要素還元主義的に分析することによって一つの可能性の束としての分析結果を導き出す。ところが、会話分析が現在の実践と次の活動の予期を分析する段になると、この要素間の関係（TCU と会話ルールとの関係）は法則による決定論ではないという特性を持つてくる。すなわち、会話分析の視点から「現在進行中の」現象を見ていくと、社会のメンバーのその場その場の局所の実践として現れてくるのである。これは、自然法則などといったときに使われる「法則」（law）が決定論であるのと対照的である。

これは、J.クルターの会話におけるアプリオリな構造とコンティンジェントな構造に関する議論を参照すればいいだろう（Coulter 1983）。それによれば、会話分析の基本概念である「隣接対」のあり方は、会話の法則ではなく、参与者の資源として使用される規則である。「質問-応答」という隣接対について考えてみると、「質問」があれば必ず次に「応答」が続くという法則によっては説明できない。「質問」があったことは、後続する発話に対して規範的なものである。「応答」の代わりに「沈黙」が続くとすれば、「応答が無い」ことが参与者によって理解可能となる。質問された人は、沈黙することによって、つまり発話しないことによって一つの行為をすることになる。また、（質問に対する）「応答」の代わりに（非難に対する）「応酬」が

続くならば、最初の発話は「質問」ではなく「非難」と解釈されたことが理解可能となる。これには「非難-応答」という隣接対が使用されていることが分かる。このように、「質問」の意味は、次に相手がどのように発話するかという偶有性 (contingency) による一方で、隣接対というアプリオリな構造に基づいて進行しているのである (水川 2004: 38)。

このように、会話分析にとって、会話とは現在のすべての条件と法則が分かれば、未来が予測できる現象ではない。むしろ、その場その場の実践により一手一手を指していく実践的行為としてみるのできるものである。会話の参加者は、相互行為のそれまでの現象 (発話) をもとに現在の実践を成し遂げる。そこでは、会話相手の「心の中」を見ることはできない。会話相手が何を考えているか、何を知っているかということは、それまでの相互行為をもとにして、会話が現在の実践を行うことによって明らかになるのである。会話分析が、参加者の立場に立つという意味はこのような意味なのである。会話分析における偶然性とアプリオリの議論は、このような会話分析の現在と未来に対する予期に関する視点を示しているといえよう。

おわりに

会話分析による TCU の発見はサククス=シュグロフの革命だったが、それは同時にその還元主義による物象化によって社会学からの乖離がはじまったときなのである。過去の現象としての会話は、TCU を基本とする分析的構築物に還元可能なものとされる。しかし、会話分析の視点は、コンテインジェントなものを現在の実践によって遂行するものとしてみることができ、未来の現象としての会話は、確定できるものではなくその可能性の束 (予期) としてみることを保持している。これは、シュグロフ等の例が示すとおりであ

る。この会話分析では参加者が常識的知識をいかに使っているかを緻密に観察し、その常識的知識を担保にしながら、TCU を確定していく作業 (見えない焦点を、現実化する作業) をしているのである。

しかし、本稿の考察によれば、会話分析による単位の研究には次のような課題があるだろう。すなわち、会話分析にとって常識的知識やネイティブの直感は、分析のための資源 (リソース) ではあるが、それ自体を解明されるものではない (注9)。このような意味で、この会話分析は、常識的知識と会話現象のリフレクシブな性質を利用しながらも、同時に見逃していると言える。ネイティブの直感からターンの構成を再編成することはできるが、その直感自体がいかなるローカルな社会秩序をつくっているかは解明しないのである。「会話におけるターンの構成」と、「それによってメンバーが行っていること」は同じではないのである (Lynch 1993)。サククス=シュグロフの会話分析は、エスノメソドロジー研究の一つの成果ではあるが、その成果をもとにもう一度、その資源 (リソース) となる常識的知識やローカルな秩序自体の研究を再構成すべきであろう。会話分析が一定の成功を得た今こそ、その試みを始めるときである。

注

この研究は、科学研究費助成研究「会話分析の発想と技法に関する系統的基礎研究」(平成14年度平成15年度若手研究 (B)) の一部である。

1. 例えば、2002年にデンマークで行われた国際会話分析会議 (International Conference on Conversation Analysis 2002) は、社会学者よりも言語学者が中心になって開催されているこの国際会議では特にデンマーク、フィンランド、スウェーデンなどの北欧の諸国を中心に会話分析が一つの言語学上の運動として

- さかんになっていることがわかった。さらに、語用論や日本語学といった自然言語を扱う研究において、会話分析は新奇な研究と言うよりひとつのスタンダードであり、言語研究の前提となりつつある。会話分析の国際学会は、エスノメソドロジー・会話分析の国際学会と別に開催された
2. このシェグロフを中心とした会話分析に関する言語学や社会言語学からの批判的考察はいくつかなされ、それに対して反批判や討論がなされている(例えば、田中 2004, Schegloff 1997b など参照)。また、エスノメソドロジーからの会話分析批判はいくつかなされている(Lynch 1993, 2000a, 2000b)が、これに対して会話分析(あるいはシェグロフなど)からの反論はほとんど無い。本稿の議論は、マイケル・リンチ(1993, 2000a, 2000b)の一連の提案、特に1993年に発表した形式分析としての会話分析という発想を推し進めるものといえる。
 3. この区別はten Haveが発案したわけではなく、会話分析に関連する国際学会で一般に流通している。また、この区別については強い異論があることを注意すべきである。たとえば、会話分析はリアルタイムの推論を研究するのであって、完成された形式を適用するだけの言語学で行われている会話分析は、それ自体「応用会話分析」であるともいえよう。これはロド・ワトソン(マンチェスター大学, personal communication)の見解などにも現れている。
 4. このシェグロフの「修復」論文が評価されたのは、それまでの言語学では単なるエラーとしてしか考えられていなかったが自然会話では頻発する、間違いを正す発話=「修復」が、相互行為の中で組織付けられており(organized), 形式的に分析可能であることを示したからであった(Mori 1999: 9)。
 5. その後のTCU研究の展開については、岩崎(2008: 209)が詳しい。
 6. そもそも、トランスクリプトを読むと、聞き直しをしているようにみえるが、実際の音声だけをただ聞いているだけでは良く分からない場合も多い。そのため分析者は何度も音声を聞いてトランスクリプトを書く。その過程そのものが分析となっている。例えば、13行の「はい：：だけでいいです：：」という後続の発話で、直前の「え？」の意味が分析されていること自体も、参与者と分析者に協働で可能な分析となっている。
 7. このことはArminen(2008)にとっては好ましいとされるであろう。Arminenは、エスノメソドロジー(EM)を、初期EM、ラディカルなEM、会話分析に分類し、その中で会話分析は「科学のエスノメソドロジー」を展開した研究法であり、標準化された科学的基準が受容されるため、「社会的行為の継起的側面の厳密な分析が可能」としている(しかし、ここでいう「科学的」とはいかなるものなのか? こうした「科学」の理解は、現代の科学論においては広く批判されてきたはずである(Lynch 1993))。このような会話分析の理解は、「素朴な実在主義」を前提とした会話分析を容認する土壌となっている。その問題点については別稿に譲ることとする。
 8. 会話分析による談話単位の革新を、社会学における「行為単位」の問題と関連付けて考えることもできる。すなわち、行為者の動機から考える伝統的社会学と、言語による相互行為を現象として分析可能にする会話分析を対比して考察することは可能である。この際にも、「行為単位」をいかに定義するかという課題が生じる。その意味で、会話分析は、「行為単位」の問題を行為者の主観的動機から考える(想像する)のではなく、言語を中心とした社会的相互行為の遂行において(現象として)分析する方法を開発したといってよいだろう。
 9. その意味で、会話分析は、エスノメソドロジー研究のトピックであるネイティブの直感や説明可能性といったものをリソースとして使用しているといえよう。会話分析にとって、その場面の説明可能性(accountability)や「ネイティブの直感」は、分析のためのリソースではあるが、それら自体を解明されるものではない。一方で、会話分析はその詳細な会話データの分析をする際に、その説明可能性や「ネイティブの直感」を具体的詳細の中から明らかにしなければ分析を実施できない。このように考えると、エスノメソドロジーは、会話分析の研究過程と成果をひとつのリソースとして秩序現象を明らかにする可能性があるといえる。この可能性についても別稿に譲りたい。

参考文献

- Arminen, I. 2008 “Scientific and ‘Radical’ Ethnomethodology: From Incompatibel Paradigms to Ethnomethodological Sociology”, *Philosophy of the Social Sciences*, 38(2): 167-191.
- Billing, M. and E. A. Schegloff, 1999 “Critical Discourse Analysis and Conversation Analysis: An Exchange between Michael Billing and Emanuel A. Schegloff”, *Discourse and Society* 10(4): 543-582.
- Clayman, S. and D. Maynard (1995) “Ethnomethodology and Conversation Analysis”, in P. ten Have and G. Psathas (eds) *Situated Order. Studies in the Social Organization of Talk and Embodied Activities*, pp. 1-30. Washington, DC: University Press
- Coulthard, M. 1977 *An Introduction to Discourse Analysis*, London: Longman = 1999 マルコム・クールタード『談話分析を学ぶ人のために』, 世界思想社。
- Ford, C.E. and S. A. Thompson 1997 “Interactional units in conversation: syntactic, intonational, and pragmatic resources for the management of turn”, in Ochs, E., E. A. Schegloff and S. A. Thompson
- Garfinkel, H. (1967) *Studies in ethnomethodology*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall
- ten Have, P. 1991 “Talk and Institution: A Reconsideration of the “Asymmetry” of Doctor-Patient Interaction”, Boden, D. Zimmerman, D. eds., *Talk and Social Structure*, 138-163, New York, Polity Press.
- ten Have, P. 1999 *Doing Conversation Analysis*, London, Sage
- ten Have, P. 2001 “Applied Conversation Analysis”, in MacHoul, A., Rapley, M. (eds.) *How to Analyse Talk in Institutional Settings: A Casebook of Methods*, London: Continuum. pp3-11.
- Heritage, J. 2004 “Conversation analysis and institutional talk: analyzing data”, in Silverman, D. (ed.) *Qualitative Research: Theory, Method and Practice*, Second Edition, London: Sage, pp222-245.
- Houtkoop, H. and H. Mazeland (1985) ‘Turns and Discourse Units in Everyday Conversation’, *Journal of Pragmatics* 9: 595-619.
- 岩崎志真子 2008 「会話における発話単位の協調的構築」 in 串田ほか編, 169-220.
- 串田秀也 2006 『相互行為秩序と会話分析』, 世界思想社
- 串田秀也ほか編 2008 『「単位」としての文と発話』(シリーズ文と発話), ひつじ書房
- Labov, W. 1970 “The Study of Language in Its Social Context”, in *Studies Generale* 23, 170: 30-87.
- Labov, W. 1972 “Rules for Ritual Insults”, in Sudnow, D. (ed.) *Studies in Social Interaction*, Free Press, 120-169.
- Lerner, G. 2003 papers presented at summer seminar (明治学院大学)
- Lerner, G. (ed.) 2004 *Conversation Analysis: From the First Generation*, Sage.
- Lynch, M. 1993 *Scientific Practice and Ordinary Action*, Cambridge.
- Lynch, M. 2000a “The ethnomethodological foundations of conversation analysis” *Text*, 24: 517-32
- Lynch, M. 2000b “Response to Wes Sharrock”, *Text*, 24: 541-4
- 水川喜文 2002 「会話分析の社会言語学的展開と社会秩序のカテゴリー E. A. Schegloff と H. Sacks」日本社会学会発表原稿
- 水川喜文 2003 「社会理論としての会話分析: 実践の中の社会と時間」日本社会学会発表原稿 (中央大学)
- 水川喜文 2004 「論理文法分析」, 山崎敬一編『実践エスノメソドロジー入門』, 有斐閣
- 西光義弘 1997 「第6章語用論」西光義弘編『日英対照による英語学概論』くろしお出版
- 西阪仰 1997 『相互行為分析という視点: 文化と心の社会学的記述』金子書房
- 西阪仰 2001 『心と行為』, 岩波書店
- Ochs, E., E. A. Schegloff and S. A. Thompson 1997 *Interaction and Grammar*, Cambridge university press.
- Sacks, H. (1972 a) ‘An initial investigation of the usability of conversational data for

- doing sociology'. In: D. Sudnow, (ed.) *Studies in social interaction*. New York: Free Press: 31-74
- Sacks, H. (1972 b) 'On the analyzability of stories by children'. In: J.J. Gumperz, & D. Hymes, ed. *Directions in Sociolinguistics: the Ethnography of Communication*. New York: Rinehart & Winston: 325-45
- Sacks, H. (1992) *Lectures on conversation*. 2 vols. Edited by Gail Jefferson with introductions by Emanuel A. Schegloff. Oxford: Basil Blackwell
- Sacks, H., E. A. Schegloff and G. Jefferson, 1974. "A simplest systematics for the organization of turn-taking in conversation". *Language* 50: 696-735. → 1978 in J.N. Schenkein (ed.) *Studies in the Organization of Conversational Interaction*, pp. 7-55. New York: Academic Press.
- Schegloff, E. A. (1979) 'The Relevance of Repair for Syntax-for-Conversation', in T. Givon (ed.) *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, pp. 261-88. New York: Academic Press.
- Schegloff, E. A. (1987) 'Analyzing Single Episodes of Conversation: An Exercise in Conversation Analysis', *Social Psychology Quarterly* 50: 101-14.
- Schegloff, E. A. (1992→1995) "Introduction" in Sacks, H. et al *Lectures on Conversation*, Blackwell, ix-lix.
- Schegloff, E. A. (1997a) "Turn organization: one intersection of grammar and interaction", in Ochs, E., E. A. Schegloff and S. A. Thompson, pp52-127.
- Schegloff, E. A. (1997b) 'Whose Text? Whose Context?', *Discourse & Society* 8 (2): 165-187.
- 権野信雄 2007 『エスノメソドロジーの可能性』, 春風社
- 平英美 2001 「Schegloffをめぐる議論のエスノグラフィー」, 『現代社会理論研究』 11: 110-121
- 田中耕一 2004 「認知主義の陥穽 — 会話分析と言説分析—」『関西学院大学社会学部紀要』 96: 121-136
- Wetherell, M. (1998) "Positioning and Interpretive Repertoires: Conversation Post-Structuralism in Dialogue", *Discourse & Society* 9: 387-412.
- Yasutake, T. (2000) 「機能主義言語学とは？」
[http://harriet2000.cool.ne.jp/functionism/function.html](http://harriet2000.cool.ne.jp/functionalism/function.html) (2009.11.4受信)

[Abstract]

A Critical Study of Conversation Analysis : The Concept of Turn-Constructional Units and Its Fallacy

Yoshifumi MIZUKAWA

This paper is a critical study of the methodologies of conversation analysis (CA). H. Sacks, E. A. Schegloff and G. Jefferson founded CA under the effects of H. Garfinkel's ethnomethodology and other sociological trends. Since then, CA has developed through intellectual exchange with linguistics and other fields. This paper focuses on a style of CA of H. Sacks, E. A. Scheloff, G. Lerner and others. This style is so-called pure CA, which "examines the social institutions of interaction as an entity" in contrast with applied CA which "studies the management of social institution of interaction as an entity in interaction" (Heritege 2004 : 223). First, this paper explains how CA found the interactional unit and revolutionized the concept of discourse units for the study of natural conversation (Coulthard 1977). Second, an analysis of CA is exemplified to demonstrate how the units, named turn-constructional units (TCU), are discovered using member's categories. Finally this paper reconsiders how CA uses commonsense knowledge, which H. Garfinkel focused on, and member's knowledge of categories, which H. Sacks develop in the early stage of CA.

